

『名所江戸百景』に描かれた江戸の周縁領域

相澤 航平¹・福井 恒明²

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1, E-mail:kohei.aizawa.5i@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 博士(工) 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

江戸では、都市が成熟する過程において様々な新名所が誕生し、その景観は、豊国や広重、北斎などの浮世絵師によって描写されてきた。これらの名所図会に映し出された景観は、江戸の人々のなかで共有された江戸の地域認識を読み解く手掛かりとなると考えられる。そこで本研究では『名所江戸百景』を対象に、江戸名所として描かれた領域の把握によって、江戸の地域認識の特徴を明らかにすることを目的とする。この結果、江戸の周縁地域に広がる台地や原野、田園や村落とともに江戸名所を描く傾向を把握し、江戸は周囲を取り囲む周縁地域との関係性のなかで認識されていた可能性があることを指摘した。

キーワード：名所、江戸東京、名所江戸百景、江戸の領域、地域認識

1. はじめに

(1) 研究背景

a) 「江戸東京」としての地域認識

大都市・東京は、世界の都市のなかでも類まれな変貌を遂げてきた都市である。東京は、家康の天下普請による江戸城下の建設によって大都市としての骨格を形成し、明治維新による東京府の制定と文明開化によって近代都市としての性格を整え、震災や戦災を経た市街地の破壊と復興を繰返しながら、現在では超高層建築を数多く抱えた現代都市としての様相を呈している。特に、明治維新以降の江戸から現代の東京に至るまでのわずか 150 年余りの間で都市の容貌は大きく変化し、現代東京の下敷きとなった江戸の面影は薄れつつある。

一方で、1980 年代に誕生した「江戸東京学」では、単なる歴史的な時代区分によって江戸と東京を二分するのではなく、両者を結び付けて把握する方法によって切り開かれ、「江戸東京」という時代通貫的な研究の視点が重要視されている¹⁾。現在でも東京の都市構造の基礎となる地形や水系、町割りなどは、江戸から引継がれてきた東京独自の特徴として関心の的となっている²⁾。また近年、江戸東京研究の第一人者である陣内らによって、時代的にも空

間的にも江戸の域を広げ、より深奥な「江戸東京」の特質を解明する「新・江戸東京学」の試みも生まれている³⁾。

なかでも、古来受け継がれてきた名所の景観は、「江戸東京」の空間構造や文化的なアイデンティティを読み解くうえで重要な研究対象となる。特に江戸は、中世に由来する寺社仏閣などの名所に加えて、産業やインフラが発達し、都市が成熟する過程において様々な新名所が誕生し、その景観は、豊国や広重、北斎などの浮世絵師によって描写されたり、観光の対象となることで、江戸の人々の間に浸透していった。このような江戸名所は、近代化が進む東京においても、『風俗画報』などの雑誌を通じて「江戸回顧」として人々に親しまれ、東京の都市形成や地域認識の醸成において重要視された可能性が指摘されている⁴⁾。それゆえ、江戸名所の分析を通して、江戸の人々に共有された地域認識を記述することは、後世に受け継がれた「江戸東京」としての地域固有の特性を明らかにする一助となるだろう。

b) 江戸周縁への意識

江戸の地域認識に関しては、例えば儒学者の藤原惺窩(1561-1619)は、関八州の四景として土峰(富士山)、武蔵(武蔵野)、隅田(隅田川)、筑波(筑波山)を挙げ、江戸を地理的な空間のなかに特徴づけている⁵⁾。また、農学者の佐藤信淵(1769-1850)は、「崇山

三方ヲ圍繞シ、以テ他鎮ト境界ヲ分チ、東方一面大洋ニ濱シ、進ンデハ以テ他國ヲ制スベク、退テハ以テ自ラ守ルニ餘リアリ⁶⁾」として、地形的な要因から江戸が王都を建設するのに適した地であると説いている。さらに、樋口(1975)は、「家康が、関八州を常に見守っていることのできるどころとして、自分の廟所を日光に選んだとき、彼は、富士山、筑波山そして男体山により境界づけられた関東平野という広大なひろがりをも明確に意識していたことができる⁷⁾」として、「広大な関東の地を三方を山にかこまれた東南に海をひかえたひとつのまとまりのある空間としてとらえていた視点があった」と述べている。以上からも、江戸は地形によって規定された広大な空間のなかに位置する都市として、市街地だけでなく周縁の地域までを一体的に捉える地域認識が江戸の人々の間で共有されていた可能性があるといえる。

実際に、江戸の都市が成熟した江戸時代後期に描かれた名所図会である『江戸名所図会』や『名所江戸百景』、『絵本江戸土産』などは、江戸周縁にわたる広範囲の地点を名所として描いており、江戸の特徴的な地域認識を読み解く手がかりとなると考えられる。

そこで本研究では、江戸時代後期に描かれた名所図会を対象とし、江戸名所として描き出された領域から江戸の空間を把握し、当時の人々が有していた江戸の地域認識の特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 既往研究と研究の位置づけ

江戸名所に関する既往研究には、名所の空間構成に着目したもの⁸⁾、名所図会や名所本に取り上げられた名所の変遷に着目したもの⁹⁾、名所の立地特性に着目したもの¹⁰⁾など、多くの蓄積がある。

たとえば、須藤・渡部(2006)¹¹⁾は、『名所江戸百景』に描かれた水辺空間に着目し、江戸の水辺の名所が、土堤・松並木・架橋の構成要素に加えて、歳時系要素が表現されて成立していることを明らかにしている。これらの既往研究では、名所の空間構成や風景描写の特徴が明らかになっているが、多くの場合、描かれた人や建築、橋梁、樹木といった描画対象として認識しやすい、いわゆる「図」的な構成要素に対する言及に留まっており、名所の空間を成立させている背景の「地」的な対象場への論考が見

られないことがある。

一方、樋口・杉山・横山(1981)¹²⁾は、江戸における四季の名所の立地特性を分析し、谷や丘陵端などの山の辺と隅田川や江戸湾沿いの水の辺に多くの名所が存在することを明らかにしているが、図会に描かれた具体的な領域の広がりや江戸の地域認識との関係までは言及されていない。

本研究では地理空間情報システム(GIS)を活用した古地図資料の重ね合わせやジオプロセッシング(空間情報処理)によって、図会の視点や視対象のより精緻な地理的分析を行い、主に中距離景に描かれた風景に着目して領域推定を行う点、江戸名所とともに描かれた周縁地域の特徴に着目して江戸の地域認識を明らかにする点に新規性がある。

(3) 研究対象

本研究では、江戸後期に描かれた名所図会のなかでも、十分な史料数があり、比較的写実性の高い作品である歌川広重による『名所江戸百景』を対象とする。

『名所江戸百景』は、江戸時代後期の安政三(1856)年から安政五(1858)年にかけて制作された錦絵連作作品である。本作品は、安政江戸地震(1855年)により、一時制作活動を中止していた初代歌川広重が、震災後はじめて着手した作品とされ¹³⁾、119 図の名所図会に加えて、梅素亭玄魚によって製作された目録の計 120 図からなる。このうち、「赤坂桐畑雨中夕けい」には二世広重の落款があり、他数図についても二世広重の筆という説があるが、本研究では表現技法の特徴ではなく、江戸名所として描かれた領域に関心の対象があるため、これらの作品についても一様に取り扱う。

(4) 研究の構成と手法

本研究では、『名所江戸百景』119 図のうち、江戸の周縁地域に視点が存在する図会に着目し、描き出された風景がどのような領域を描いたものかを地図上で推定し、江戸の地域認識との関係性を考察する。

まず、『名所江戸百景』を含む錦絵の江戸時代における位置づけと『名所江戸百景』編纂の特徴を整理する(2 章)。次に 119 図の図会の視点分布の特徴を概観するために、GIS を活用した分析を行い、領域推定を行う江戸の周縁地域を描いた図会の選定を

行う(3章). 選定した図会について、視点の位置や視対象に関する既往の言説を確認しつつ、構図と地図資料の照合、可視領域分析等の空間情報処理をもとに描かれた領域を推定する(4章). 最後に、領域推定の結果から江戸の地域認識の特徴について考察する(5章).

(5) 用語の整理

篠原(1982)は、固定的な視点からの透視図的(写真的)な眺め¹⁴⁾を「シーン景観」と定義しており、「シーン景観」の構成要素として、「視点」「視点場」「主対象」「対象場」の4つを示している。

a) 視点

視点とは、「景観を眺める人の位置¹⁵⁾」であり、本研究では、広重によって図会が描かれたと推定できる地点を視点と記述する。

b) 視点場

視点場とは、「視点の存在する空間であり、視点近傍の空間」である。本研究では、図会が描かれたと推定できる視点近傍の空間を視点場と記述する。

c) 主対象・対象場

主対象とは、視点場から見える眺めのなかで「景観の性格を規定し、ほかの対象を景観的に支配している対象(群)」のことであり、本図会では主題が相当すると考えられる。また、対象場とは「眺められている対象群から視点場と主対象を除いたすべての対象」であり、主役となる要素を浮かび上がらせるための背景のことである。本研究で主に研究対象として着目するのは対象場に描かれた領域となる。

以上の定義を踏まえつつ、本研究では主対象および対象場を総じて「視対象」と呼ぶ。

2. 錦絵の受容層と図会編纂の特徴

(1) 錦絵の大衆性と地域認識

大久保(2013)によると、錦絵は、17世紀以降の彩色技術および紙質の改良と制作工程の分業が確立したことで、飛躍的に発展した浮世絵の完成段階と位置付けられている¹⁶⁾。特に、版画による表現の錦絵は、肉筆画と異なり、大量かつ安価に供給することが可能であり、武家から庶民に渡る広範囲な社会階層に属する人々に享受されたことが特徴的である。この点において、錦絵を通じた江戸の名所イメージ

は、限定的な人々に共有されたものではなく、江戸時代当時の幅広い人々のなかに形成され、享受されたことが推察される。

一方で、錦絵の制作においては、絵師だけでなく出版資本となる版元の存在が重要となり、商品としての訴求力を高め、利潤を生み出すために絵の内容に関して版元側から注文がつくことが通例であったとされる。すなわち、錦絵に描かれる名所の選定や図様においては、利潤を重視し、商品の訴求力を高めるための恣意的な意図が存在すると考えられる。しかし、版元の意図に限定されつつも、江戸庶民を中心に広く親しまれた浮世絵は、江戸時代に大衆が抱いていた江戸名所のイメージおよび江戸の地域認識の一端を読み取る史料としての価値があると考えられる。

(2) 『名所江戸百景』編纂の特徴

『名所江戸百景』が制作された江戸時代後期は、不景気が続くなかで、絵草紙屋と呼ばれる版元業が、一攫千金を狙う江戸の商人に注目されたと言われている。『名所江戸百景』の版元である魚屋栄吉は、上野新黒門町(現、台東区上野一丁目)にて、安政江戸地震の直前に時流に乗ったこの出版業を営み始めたばかりの商人であり¹⁷⁾、地震後の江戸名所を百景以上に渡り描く大作を浮世絵師の第一人者である広重に依頼し、地震から4か月後の安政三(1856)年2月から出版を始めている。

広重が『名所江戸百景』制作の皮切りに描いたのは、改印の年月から「堀江ねこざね」「玉川堤の花」「千束の池袈裟掛松」「千住の大はし」「芝うらの風景」の5図とされており、このうち芝浦を除く4図に描かれた場所は、広重が初めて描く名所である¹⁸⁾。このような、江戸の大衆の間で馴染みのある従来からの名所ではなく、目新しい場所が『名所江戸百景』連作の最初に描かれたことから、版元は、商品の訴求力を高めるためにさまざまな意外性を広重に求めた可能性がある¹⁹⁾ことが指摘されている。加えて、一枚摺りの錦絵連作としては異例の100図を超える企画からも、版元が作品の意外性を追求し、江戸大衆の話題を攫おうとした狙いがあるとされている。つまり『名所江戸百景』は、これまでにない新たな場所を含めた安政江戸地震後の江戸名所の状況を新たな切り口から報道することで話題を呼び、商品の訴求力を高めるねらいがあったと言える。

3. 図会の視点とその分布特性

(1) 視点分布の分析方法

本章では『名所江戸百景』に描かれた名所分布の傾向を概観することを目的とし、GISを活用した視点の分析を行う。

まず、文献調査により『名所江戸百景』119図の名所絵が描かれた視点の位置を特定し、GIS上にプロットする。『名所江戸百景』の視点位置については、数多くの分析が行われているが、本研究ではヘンリー・スミス(1992)²⁰⁾、宮尾(1992)²¹⁾、堀(1996)²²⁾によって示された視点位置を参照する。次に、カーネル密度法を用いた視点分布の密度推定を行い、その傾向をヒートマップによって可視化し、視点分布の地理座標的重心である分布中心とともに図化する(図-1)。

(2) 名所分布の特徴

視点分布の密度は、五街道の起点となる日本橋付近が最も高密度を示し、奥州街道と東海道をなぞるように北東から南西に長い形状をしており、主要な街道沿いに名所の視点場が位置することがわかる。また、江戸幕府が公式見解として江戸の領域を示した朱引や江戸町奉行の管轄範囲である墨引の外側にまで視点分布が及んでいることが確認できる。

具体的なヒートマップの広がり方は、分布中心から

3km圏内で最も高密度で分布し、描かれた名所絵は33図に上る。また、3kmから6km圏内で再び密度の高い箇所が分布中心の北東部と南東部に部分的に表われ、この範囲内だけで40図の図会が描かれている。6km圏外になると、比較的密度が高くなる箇所が現在の目黒区や板橋区、荒川区付近で見られるようになり、分布中心から12kmを超えた範囲では高密度の箇所は見られないものの、視点分布が広域に渡ることが確認できる。特に、『名所江戸百景』が描かれた視点分布は、江戸市中から江戸の周辺地域に至るまで連続的な分布傾向が見られるのではなく、低密度の地域を挟みながら不連続に江戸の周辺地域へと広がっていることが特徴的である。

そこで本研究では『名所江戸百景』の視点分布について次の区分を行い(表-1)、江戸名所として図会に描かれた領域に着目する。

a) 第1層(江戸中心地域)

視点の分布中心から6km圏内の視点場が最も集中して分布する地域。これは、日本橋、霞が関など、江戸の政治的・経済的な中心地域と一致する。

b) 第2層(江戸郊外地域)

視点の分布中心から6km以上9km圏内の視点場が集中して分布する地域。これは、浅草や上野、内藤新宿など、江戸の市街地からやや外れた郊外地域を含み、東西は江戸市中の範囲を示す朱引・墨引の境界線と概ね一致する。

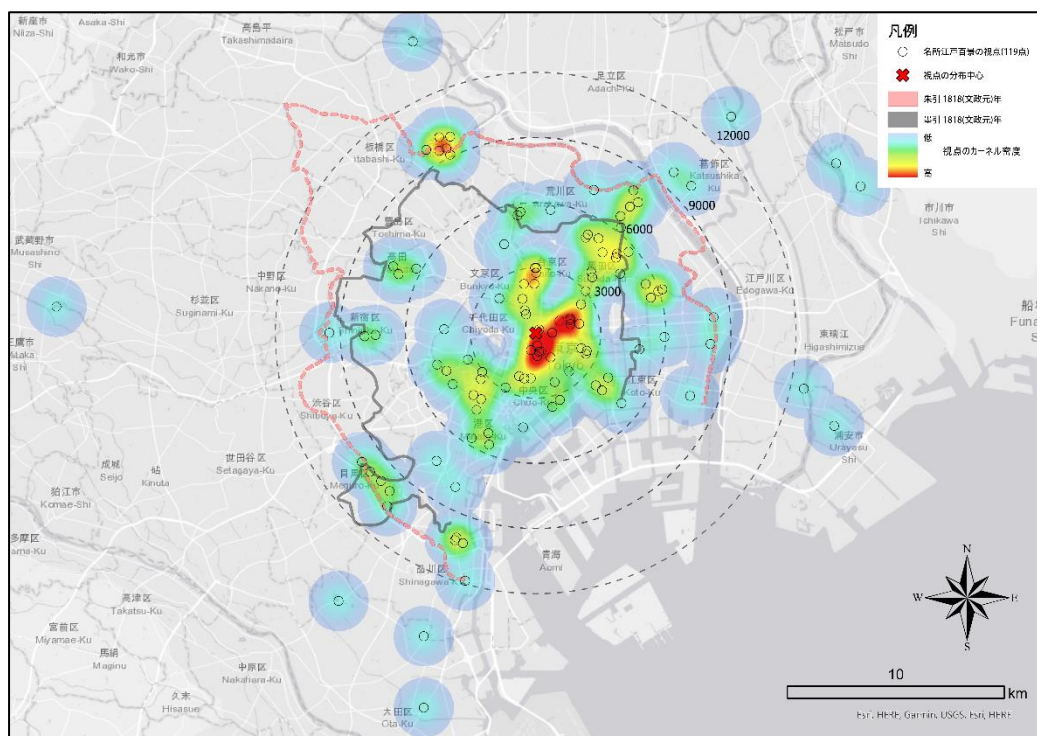


図-2 『名所江戸百景』の視点分布のカーネル密度推定結果

c) 第3層(江戸周縁地域)

視点の分布中心から9km圏外の視点が集中する箇所が点在する地域。これは、目黒、品川、江戸川付近など、朱引よりさらに外側の江戸周縁地域といえる。

表-1 分布区分ごとの名所図会数

分布区分	分布中心からの距離	図会数
第1層(江戸中心地域)	3km 圏内	33
	3km～6km 圏内	40
第2層(江戸郊外地域)	6km～9km 圏内	18
第3層(江戸周縁地域)	9km～12km 圏内	18
	12km 圏外	10
計		119 図

4. 図会に描かれた領域の推定

(1) 領域推定分析の方法

本章では、前章の分布区分をもとに、第3層(江戸周縁地域)を視点として描かれた図会28図(表-2)を分析し、視対象の位置・領域の推定を行う。なお、本研究で領域の推定を行うのは、遠距離景に描かれた富士山や筑波山などの山景を除いた視点周辺に広がる中距離景までの領域とする。分析の手順は次に示す通りである。

- ① 図会の視点や視対象に関する既往の言説を整理するために、文献調査(表-3)を行い、描かれた要素を把握する。
- ② 図会の構図と地図史料(表-4)との比較、他の図会史料や古写真との比較、可視領域分析などのジオプロセッシングをもとに領域の推定を行い、GIS上に描画する。推定した領域については、構図の水平視野、中距離景に描かれた領域の最大視距離を計測する。

(2) 領域推定の例

本節では、No.19「目黒新富士」(図-3)を例としての領域推定の結果を示す。

a) 文献調査による視点・視対象の整理

本図の題材は、文政2(1819)年に直参近藤重蔵の邸内に築造された富士塚であり²³⁾、遠距離景に描かれた富士山と対照的な構図として描かれている。富士塚の麓には三田用水が流れており、富士塚を囲うように奥へと続いている。

表-2 領域推定分析を行う図会²⁴⁾

No	図会名	改印年
1	堀江ねこさね	1856年2月
2	千束の池袈裟懸松	1856年2月
3	品川御殿やま	1856年4月
4	品川すさき	1856年4月
5	井の頭の池弁天の社	1856年4月
6	王子滝の川	1856年4月
7	飛鳥山北の眺望	1856年5月
8	八景坂鎧掛松	1856年5月
9	鴻の台とね川風景	1856年5月
10	目黒千代か池	1856年7月
11	角管熊野十二社 俗称十二そう	1856年7月
12	利根川ばらばらまつ	1856年8月
13	真間の紅葉手古那の社継はし	1857年1月
14	王子音無川堰タイ 世俗大滝ト唱	1857年2月
15	川口のわたし善光寺	1857年2月
16	蒲田の梅園	1857年2月
17	にい宿のわたし	1857年2月
18	南品川鮫海岸	1857年2月
19	目黒新富士	1857年4月
20	目黒元不二	1857年4月
21	目黒爺々が茶屋	1857年4月
22	目黒太鼓橋夕日の岡	1857年4月
23	堀切の花菖蒲	1857年閏5月
24	月の岬	1857年8月
25	王子稲荷の社	1857年9月
26	王子不動之滝	1857年9月
27	王子装束糸の木大晦日の狐火	1857年9月
28	はねたのわたし弁天の社	1858年8月

表-3 文献資料一覧

No.	著者名	書名	発行年	発行者
1	大野光政	江戸百景今昔	2009年	本の泉社
2	小池満紀子 池田美美	広重 TOKYO 名所江戸百景	2017年	講談社
3	太田記念美術館監修	広重 名所江戸百景	2017年	美術出版社
4	安村敏信	太陽の地図帖 広重「名所江戸百景の旅」	2015年	平凡社
5	堀見明	広重の大江戸名所百景散歩	1996年	人文社
6	ヘンリー・スミス	広重 名所絵百景	1992年	岩波書店
7	浅野秀剛監修	広重 名所江戸百景	2007年	小学館
8	メラニー・トレデー ローレンツ・ビヒラー	歌川広重 名所江戸百景	2008年	TASCHEN

表-4 地図資料一覧

No.	発行者	地図資料名	測量年等	発行年
1	エービービー カンパニー	江戸東京重ね地図	1856年(復元)	2003年
2	大日本帝國参謀 陸軍測量局	第一軍管区地方二万分 一迅速測図原図	1883～1884年	1883 ～1884年
3	大日本帝國参謀 陸軍測量局	五千分一東京図測量図 原図	1886～1887年	1886 ～1887年
4	大日本帝國参謀 陸軍測量局	一万分一地形図	1909,1937年	1910年 1937年
5	国土地理院	1:50,000 デジタル標高 地形図 関東東京	2017年	2017年

本図では富士塚、富士山、三田用水が描かれた視対象として取り上げられているが、富士塚より奥側の中距離景に広がる台地や低湿地のような対象場については具体的な論考があまり見られない。



図-3 『名所江戸百景』 「目黒新富士」²⁵⁾

広重は本図と同じ場所を『絵本江戸土産』第7編「同所富士山上眺望」(図-4)においても、ほぼ同じ構図によって描いており、本図と同様に中距離景には、寺社仏閣建築と思われる建物や集落が台地や樹林のまとまりと共に描かれていることが分かる。一方で、図-4には富士塚の手前に人家の屋根が描かれており、視点の高さが富士塚の標高と同程度の位置であることが推測できる。



図-4 「同所新富士山上眺望」²⁶⁾

(歌川広重『絵本江戸土産』第7編 15)

さらに、『今昔対照江戸百景』(1919)によると、この富士塚は別所坂を上った先にある笹間洗耳氏の庭内に位置し、「今は、年ふりたる躑躅の樹などが、趣を添え、蝸螺なりに登る道は、石を据ゑて足がよりとなし、其頂を究れば、亦、脚下の田畑や人家は、パノラマを窺く如く²⁷⁾」と記述されていることから少なくとも大正前期までは現存したことが確認できる。

b) 地図資料との照合と GIS による分析

安政 3(1856)年の江戸を再現した「江戸東京重ね地図」(2003)を確認すると、別所坂南の三田用水沿いに目黒新富士の記載がある。また、明治 42(1909)年測図の「1 万分 1 地形図」(1909)では同じ地点に三角点の表記と標高 39.1m の記載があり、両地図の比較からもこの位置に目黒新富士が存在したことが確認できる(図-5)。したがって、この図会は地図に記載された三角点からやや北側の用水沿いから俯瞰して眺めた構図となると考えられる(図-5)。また、三田用水が目黒新富士の麓を沿うように湾曲して南側に流れている点においても、図会の構図と一致するといえる。



図-5 地図の比較による視点位置の推定²⁸⁾

次に、中距離景に描かれた建築 A に着目する(図-6)。この建築 A は正覚寺、祐天寺、目黒不動の 3 説が唱えられていることが文献から確認できた。これらの寺院の位置関係を確認すると、視点から北西方向に正覚寺および祐天寺が位置し、この 2 つの寺院よりもやや西側の方向に富士山頂が眺望できることが分かる(図-7)。一方、目黒不動は視点から南南東方向に位置し、富士塚とほぼ同方向となり、本図の構図では富士塚の背後に隠れる可能性がある。

さらに、「1:50,000 デジタル標高地形図 関東東京」(2017)の標高データをもとに視点からの可視領

域分析を行うと、目黒不動は可視領域に含まれないことが判明した(図-7). したがって、建築Aが目黒不動である可能性は低いといえる.

また、「第一軍管区地方二万分一迅速測図原図」(1883-1834)から等高線を確認すると、祐天寺は、中目黒村の台地上に位置しており、一方の正覚寺は台地の淵に位置している. 本図では、建築Aが台地部分の麓に描かれていることから、建築Aは正覚寺であると判断して矛盾はないと考えられる.

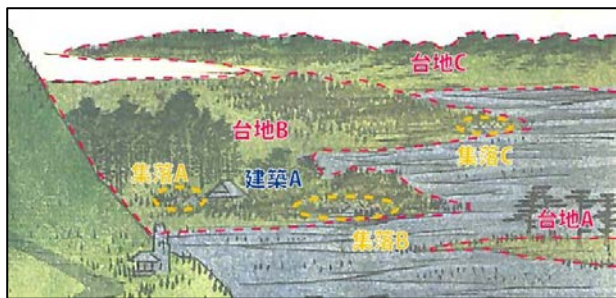


図-6「目黒新富士」の拡大図(筆者加筆)²⁹⁾

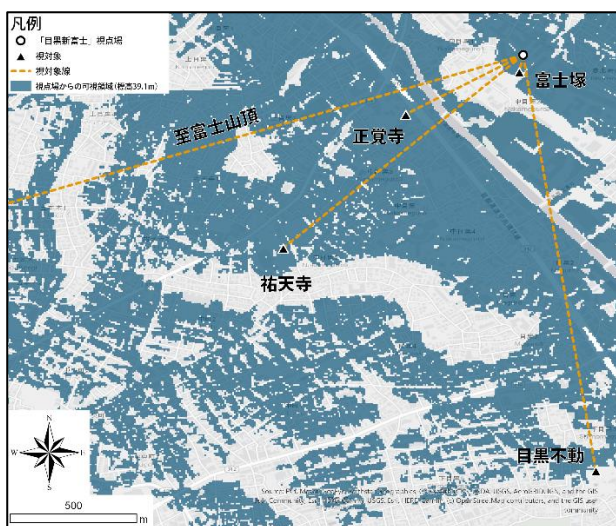


図-7 視点からの可視領域

また、台地 A, B, C については、正覚寺西部に広がる蛇崩川を囲う台地の形状と可視領域分析の結果から図-8に示す領域であることが推測できる. このとき、「江戸東京重ね地図」を確認すると、台地際に描かれた集落 A, B, C の位置には、中目黒村と上目黒村の小集落が記載されている(図-9)ことから図会の構図とも矛盾がなく、これらの集落が描かれているものと推定できる.

以上の領域推定分析の結果より、「目黒新富士」の領域推定結果を図-10に示す.

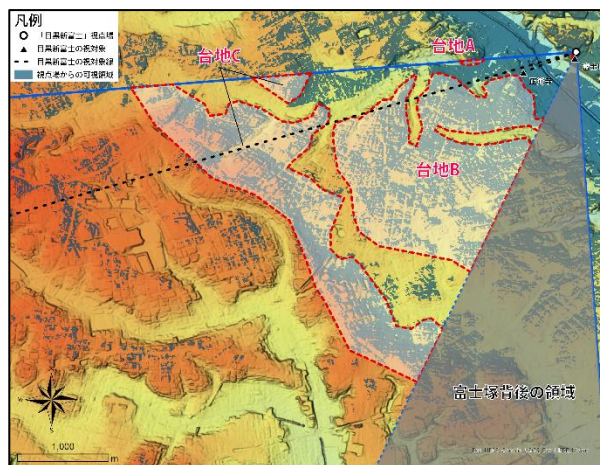


図-8「目黒新富士」の中距離景部分の拡大図

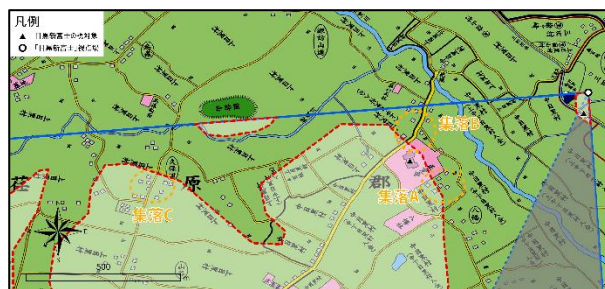


図-9 台地際に描かれた集落の推定

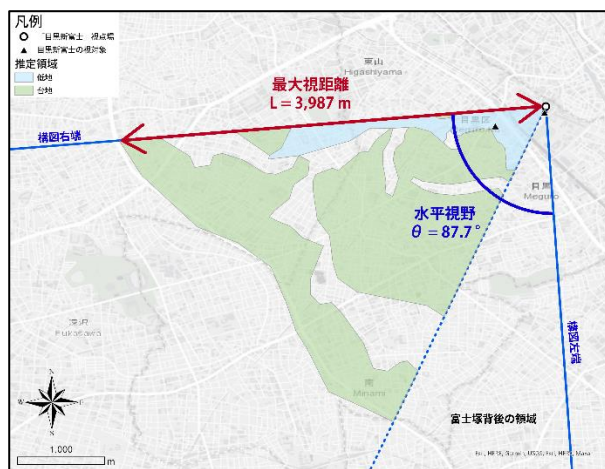


図-10「目黒新富士」の領域推定結果

(3) 領域推定の結果と分析図

同様に、第 3 層(江戸周縁地域)を視点として描いた図会 28 図の領域推定を行った結果、水平視野、最大視距離ともに推定ができた図会は 20 図であり、最大視距離のみ推定できた図会が 3 図、残り 5 図は領域の特定が困難であった(表-5). 領域の特定が困難であった図会は、単一の視対象を大きく描く構図や地図資料上で視対象の位置が特定できなかったものなどがある. 以上、領域推定分析の結果をもとに、水平視野および最大視距離ともに推定が可能であっ

た20図について、図-11に示す作成方法により、分析図を作成した(図-12、図-13、図-14、図-15、図-16、図-17)。

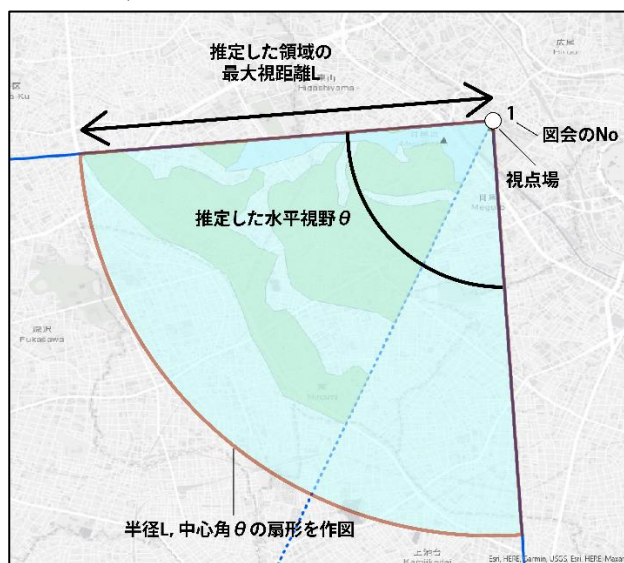


図-11 分析図の作図方法と凡例

表-5 領域推定の結果

No	図会名	水平視野(°)	最大視距離(m)
1	堀江ねこざね	85.0	759
2	千束の池袋松懸松	51.2	1,255
3	品川御殿やま	不可	不可
4	品川すさき	17.6	384
5	井の頭の池弁天の社	33.8	255
6	王子滝の川	49	261
7	飛鳥山北の眺望	不可	2,122
8	八景坂鑑掛松	79.3	4,133
9	鴻の台とね川風景	不可	2,482
10	目黒千代か池	40.8	185
11	角筈熊野十二社 俗称十二そう	34.7	572
12	利根川ばらばらまつ	不可	不可
13	真間の紅葉手古那の社継はし	82.6	1,678
14	王子音無川堰タイ 世俗大滝ト唱	86.6	540
15	川口のわたし善光寺	44.9	1,022
16	蒲田の梅園	不可	不可
17	にい宿のわたし	35.4	810
18	南品川鮫洲海岸	53.8	1,985
19	目黒新富士	87.7	3,987
20	目黒元不二	54.0	1,154
21	目黒爺々が茶屋	86.4	2,155
22	目黒太鼓橋夕日の岡	41.7	238
23	堀切の花菖蒲	36.2	902
24	月の岬	不可	不可
25	王子稲荷の社	12.2	1,525
26	王子不動の滝	不可	不可
27	王子装束糸の木大晦日の狐火	34.0	510
28	はねたのわたし弁天の社	不可	1,716

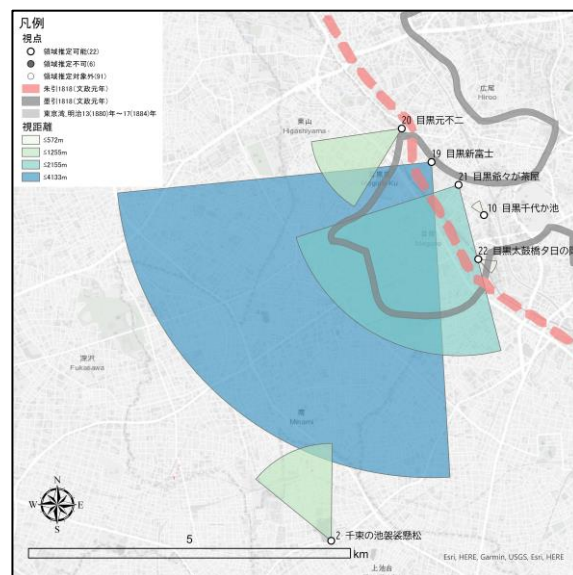


図-12 視野と視距離の分析図 1(目黒周辺)

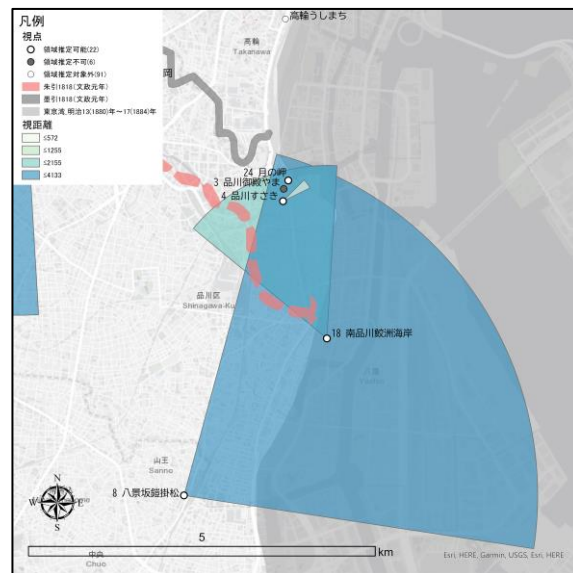


図-13 視野と視距離の分析図 2(品川周辺)



図-14 視野と視距離の分析図 3(荒川下流周辺)

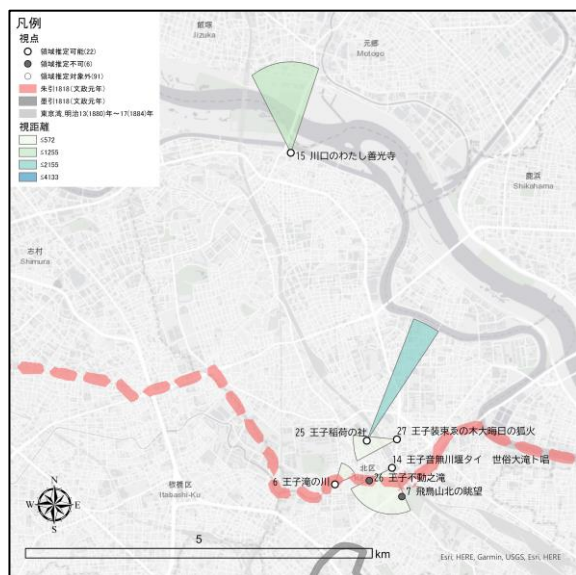


図-15 視野と視距離の分析図 4(王子周辺)

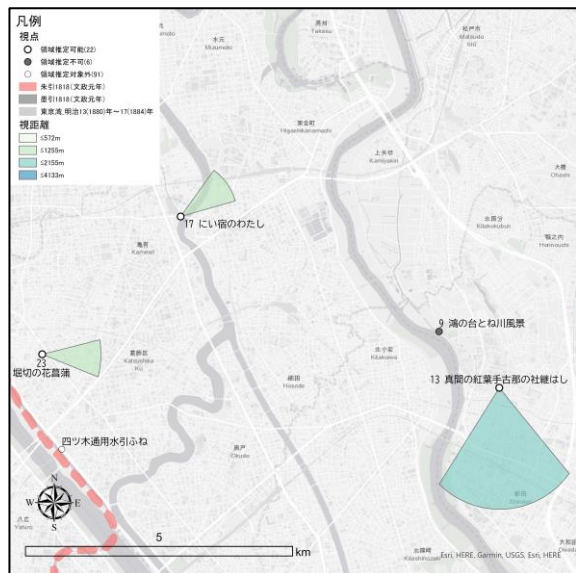


図-16 視野と視距離の分析図 5(向島周辺)

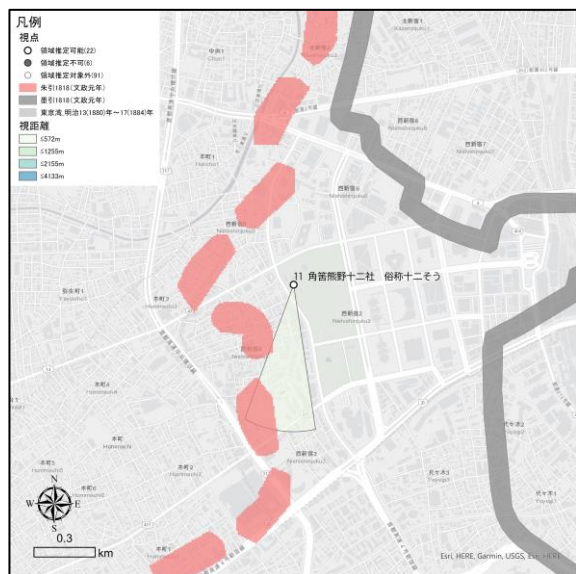


図-17 視野と視距離の分析図 6(内藤新宿周辺)

5. 江戸周縁地域への視点と地域認識

『名所江戸百景』119 図のうち、視点が江戸周縁地域に位置する 28 図の分析を行った結果、遠距離景に聳える山景を除き、視点から描かれた対象場は 1000m 圏内を見渡した領域であることが判明した。清水・布施(2009)も指摘しているように、広重の風景画は主題となるモチーフや構図を多少デフォルメすることがあっても、その場から見渡すことができる範囲の風景を描いていた³⁰⁾ことが推察される。また、描かれた台地や原野、集落などは、古地図資料の記載との整合性が取れることが少なくなく、広重の図会が視点から眺望できた実際の江戸の風景を写實的に描いていると考えられる。

さらに、目黒付近や隅田川上流地域には、図会に描かれた領域が偏在する箇所や同じ領域を複数回描いていることが確認された。広重によって切り取られた江戸名所の風景は、江戸の周縁地域に広がる地形やそこに住まう人々の暮らしにも着目するとともに、周縁地域のなかでも特に江戸名所として重視した地域が存在することが推察され、残る図会に関する領域推定によって具体的に明らかになるものと考えられる。

以上、江戸名所として描かれた図会の特徴より、江戸は江戸市中だけでなく江戸の周縁地域も含めた地域認識のもとに成立していたことが推察される。このような地域認識は、名所図会などに描かれた風景によって江戸後期の人々に共有され、大都市の江戸を取り囲む広大な台地や広野、田園や村落などとの関係性のもとに江戸の地域が認識されていたものと考えられる。

6. まとめ

(1) 本研究の成果

本研究では、歌川広重による『名所江戸百景』119 図の視点分布の傾向を分析し、江戸の周縁地域を描いた図会 28 図の領域特定分析を通して、次の内容を指摘した。

1) 領域推定分析により、視点からの視距離と水平視野を推定し、江戸の周縁地域の視点からさらに周縁に広がる武蔵野や隅田川東部の低地などを眺める特徴的な視点によって図会が描かれていることを指

摘した。

2) 江戸は江戸市中だけでなく江戸の周縁地域も含めた地域認識のもとに成立していたことが推察され、江戸を取り囲む広大な台地や広野、田園や村落など周縁地域の関係性のもとに江戸の地域が認識されていた可能性を指摘した。

(2) 今後の課題

『名所江戸百景』119 図の全名所絵の領域推定分析を行うことを今後の課題とし、江戸中心地域を描いた図

会との比較から、江戸の周縁地域への認識を検証していく必要がある。また、江戸の周縁地域のなかでも、特に江戸名所として重視された地域を分析し、江戸と周縁地域の関係性を明らかにすることも重要である。さらに、近世以降に描かれた名所絵・案内本等の挿絵を対象とした領域推定分析により、江戸から東京に変化する過程で、名所として認識された空間や地域認識にどのような変遷が見られるのかを検証することも重要である。

謝辞

本研究は、法政大学江戸東京研究センター(EToS)の江戸東京アトラスプロジェクトにおける研究成果の一部である。共にプロジェクトを進めている法政大学文学部地理学科米家志乃布ゼミの皆様、同デザイン工学部都市環境デザイン工学科景観研究室の皆さんに感謝いたします。また、研究ワークショップを通じて、田中優子先生、陣内秀信先生、横山泰子先生、高村雅彦先生など多くの先生方から貴重なご意見を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 小木新造・陣内秀信ら：江戸東京学辞典新装版，pp.1-2，三省堂，2003。
- 2) たとえば、『東京人』，No.412，都市出版株式会社，2019 など。
- 3) 法政大学江戸東京研究センター：EToS①，p.6，法政大学，2018。
- 4) 米家志乃布：近代の名所図会にみる江戸イメージ，法政地理，第 52 号，pp.190-124，2020。
- 5) 樋口忠彦：景観の構造，p.125，技法堂出版株式会社，1975。
- 6) 佐藤信淵：宇内混同秘策，p.174，大同館書店，1937。

- 7) 同掲 5)
- 8) 柳沢 和彦，岡崎 甚幸：風景構成法に基づく広重の風景版画の空間構成に関する研究：「梓」と川との関係に着目して，日本建築学会計画系論文集，No.67-559，pp.179-186，2002。
- 9) 岡野 祥一，十代田 朗，羽生 冬佳：名所本にみる江戸期を通じた近郊名所の変遷に関する研究，造園学会，ランドスケープ研究，No.65-5，pp.797-800，2001。
- 10) 樋口 忠彦・杉山 晃一・横山 隆二郎：江戸の四季の名所について，都市計画論文集，16 巻，pp. 379-384，1981。
- 11) 須藤順平・渡部一二：広重の描いた『名所江戸百景』にみる水辺空間の構成，造園学会，ランドスケープ研究，No.69-5，pp.725-730，2006。
- 12) 同掲 12)
- 13) 原信田実：謎解き広重「江戸百」，p.45，集英社，2007。
- 14) 篠原修：新体系土木工学 59 土木景観計画，p.29，技法堂出版，1982。
- 15) 篠原修編：景観用語辞典増補改定第二版，p.30，彰国社，2021。
- 16) 大久保純一：浮世絵出版論—大量生産・消費される〈美術〉—，p.9，吉川弘文館，2013。
- 17) 同掲 13)，p.44。
- 18) 同掲 13)，p.46。
- 19) 同掲 13)，pp.46-48。
- 20) ヘンリー・スミス：広重 名所江戸百景，p.6，岩波書店，1992。
- 21) 宮尾しげを：名所江戸百景，pp.186-187，集英社，1992。
- 22) 堀晃明：広重の大江戸名所百景散歩，巻頭頁，人文社，2005。
- 23) 同掲 20)，p.64。
- 24) 同掲 20)，pp.20-254。
- 25) 同掲 20)，p.65。
- 26) 国立国会図書館 デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8369312/19> [最終閲覧日(2021 年 8 月 29 日)]
- 27) 大野光政：江戸百景今昔，p.107，本の泉社，2009。
- 28) エービーピーカンパニー：「江戸東京重ね地図」，丸善株式会社，2003／清水靖夫：「明治・大正・昭和一万分一地形図集成」，柏書房，1983。
- 29) 同掲 23)
- 30) 清水英範・布施孝志：再現江戸の景観，pp.147-148，鹿島出版会，2009。